



Title	鐵齋書讚
Author(s)	金杉, 光子
Citation	懷徳. 1956, 27, p. 65-66
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90299">https://hdl.handle.net/11094/90299</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 鐵齋畫讚

金杉光子

明治・大正時代の日本畫集を繙くと、斷然鐵齋の作品は異彩を放つている。

私は、先づ「不盡山頂全圖」に驚嘆する。もし、この圖に先のような題名が附してなかつたら、一體何だろうと疑いたくなる。鐵齋は、その圖の左上に、又繪の一部と見てもいゝような、大きな(まるで見出しのような)畫題を書いてある。だから、なるほど富士山の頂なのだとな納得できるのである。私達は、富士山の圖といえば、すぐ大雅堂や北齋など、又、和田英作や、梅原龍三郎などの遠景に望む富士山の代表作を頭に浮べてしまう。それは私が東海道線の汽車の窓や、東京の街から遙か眺めた富士の麗姿と何ら矛盾しないからである。然し、鐵齋の富士はまさに不盡のおもしろさを持つている。第一に私の常識的な富士のイメージを完全に裏切る。その異様な迫力は、富士山の全景でなく畫題どおり、頂の部分がモチーフになつてゐることである。それが眺めた富士で

なく、とに角、草鞋で踏みしめて登りつめた質感の富士であり、又、それを客觀的に再現した富士なのである。そこに彼特有のリアリズムがある。奇怪な山頂の岩(らしい)の不規則な突出、それが實にリズムカルであり、個々の岩にムーブメントがあつて、その不協和音的な構成が、いやにポリリズムを感じさせる。それに加えて、登り道が岩の間に見え隠れし、小さな小舎の屋根もあり又、あるところには草の一本一本も細かに描かれてるのがわかる。又、三人程の登山者も見える。(その中の一人が鐵齋であるという人もある。)頂の下の方は渺茫たる雲の海である。左右の下の方にその流れが見える。この雲の筋を境にして畫面にない裾野を感じさせるのも怖るべき手腕である。雲一筋の流れで、頂と裾野を割したように見せかけ逆に山頂と麓と直結した矛盾を抱かせると同時に、頂の遙か下に裾野の擴がりを想わせるような効果を醸し出している。これは私達の觀念の富士ではない。あくまでも鐵齋の質感の創造した不盡山頂である。

この作品は鐵齋の中期、六十六歳の時の制作である。(一九〇一年)文人畫の類型のものが、「つく芋山水」というあだ名で繪畫藝術からすではじき出されてしまつた時代である。とかく文人の手すさびになるものが純粹藝

術から閉め出される憂き目に逢つたにもかゝらず、他人が鐵齋に、彼の繪について何か評批めいたことをいうと彼は一言のもとに「俺は學者だぞ。」と豪語して受け付けなかつたという。世間がどう評價しようと、社會の風がどう吹こうと彼は儒學者であることを誇り、しかも彼の強烈な自我を繪畫によつて表現することを止めなかつた。晩年、殊に八十歳以上になつてからの繪はますます生命力の充溢した新鮮な感覺を思うままに表現している。墨繪や南畫風の淡彩の手法でありながら、當時の西歐のキュービズムを思わせるような作風は絶頂になつてゐる。

彼八十五歳の時の作品「白隠訪白幽子」の圖は徳川初期の禪傑白隠が修業時代に健康を害したので白幽という隠士を白川村の洞窟に訪れて、内觀法を授けてもらつてゐるといふ光景を描いたものである。素材としては、もちろん想像畫であるが、鐵齋は東山にある白幽の墓に幾度も訪れ、又洛北白川村の山中の洞窟も探索したということである。描くためのみの目的で實地に踏んでみたのではないのであろうが、これでもわかるように彼は直に感じ見たものに實に逞しい創造力を發揮している。この圖のジグザクの山道の兩端の笹や樹は極めて黒々とリアルに描かれているのに、山道の上にあたかも乗つたよう

に見える洞の中で、いわゆる白隠と白幽兩人ともが舞臺の上の役者のようにこちらを向いて談話している様は實にその場のはつきりした寮圍氣すら見る者に感じさせるのである。こゝにも「不盡山頂全圖」に見るようなりアルな筆法と奇想な構圖が融和して實在感を如實に感じさせているのである。

こういう彼の独自の作風こそ、鐵齋が生涯一貫して揺がなかつた對象を實感として把握しなければ止まなかつた執拗なまでのリアリティの追求の癡集なのであろう。それが東洋的な非現實性や繊細さを超越して、近代西歐の藝術精神にまで相通ずるような卓絶したものを産み出させたのであろう。

私がこんな鑑賞めいたものを書いてみると「不盡山頂全圖」の中の登山者の一人、八十九歳の長壽を全うした鐵齋先生、「俺は學者だぞ。」と例の奇妙な岩の間から一喝しそうである。